



千葉市美術館ニュース「C'n」90号

vol. 90

千葉市美術館 Chiba City Museum of Art

〔編集・発行〕
〒260-0013 千葉市中央区中央 3-10-8 TEL. 043-221-2311 FAX. 043-221-2316
Chiba City Museum of Art 3-10-8 Chuo, Chuo-ku, Chiba 260-0013, Japan
http://www.ccma-net.jp/
〔発行日〕2019年6月14日
〔印刷〕株式会社 エイチケイ グラフィックス

連載 館長のつれづれだより

特集 板橋区美×千葉市美 日本美術コレクション展
—夢のCHITABASHI美術館!?

美術館の仕事を紹介します！
「その4 広報の仕事①」

「美術館の新しい仲間を紹介します」

【イベント報告】アート&クラフト市

Column 「リニューアルに向けて」
「ボランティア日和」



柴田是真 《猫鼠を覗う図》(部分) 明治17年(1884) 板橋区立美術館蔵



館長のつれづれだより 「ちたばし展」と板橋区立美術館の思い出

「『ちたばし展』にかかわる内容で今回のニュースは書いて下さい」と、編集担当者からの注文がありました。さて、「ちたばし」って一体何もの？ と、一瞬戸惑いました。次に、今日の若者に通有するいわゆる略語か駄洒落だろうと気づきました。「それにしても……？」と、思うのは老人である証拠でしょうか。若い人たちにとっては、こちらの方がインパクトがあるのです。もう巷では、けっこうな評判、話題になっているとのこと。「ちば」と「いたばし」で「ちたばし」か。そんな解説を加えようとするのは、そもそもすでに若くないから。音や目から入る情報を感覚的に捉え、美術館に展覧会を見に来る。行って面白いと思ったり、人が沢山そこに来ていれば、ツイッターやラインやフェイスブックを使って、友達や仲間たちに知らせる。それが最近の展覧会情報の伝達の仕方とも聞いています。

ところで、わたしと板橋区立美術館とのかわりは、千葉市美術館とのそれよりは

ずいぶん古いといえます。昭和59年に同館で開催された「英一蝶」展での出品作品の情報収集・調査・選定などの仕事に、この展覧会の担当者であった安村敏信さん(前板橋区立美術館館長・萬美術屋・小布施北斎館館長)のお誘いで参加したのです。その理由は、その前々年あるいはもう少し前に、わたしが東京都港区にある承教寺(この寺に一蝶の墓があります)に伝わる一蝶の「釈迦如来像」を港区の有形文化財に指定し、その報告書に解説を書いたのが安村さんの目にとまり、わたしに連絡をしてきたのです。この作品は、図像的には、いわゆる「清涼寺式釈迦」の形式によるもので、絹本に極彩色による非常に緻密な描法で、謹厳という評語が相応しい、普通われわれが見る風俗画をよく描く洒落な画風とは一線を画すものです。時に、無頼といわれることもある一蝶の、仏教徒としての生真面目な反面が窺えて興味深い作品なのです。

展覧会のための作品調査は、一蝶研究の上でもかなり本格的なもので、東京の美術館、博物館はもとより、水戸のほか関東一円、さらには関西まで足を延ばして行いました。メンバーには、中村溪男(東京国立博物館)、山川武(東京藝術大学)の両先生に小林忠先生も加わっていたと記憶します。すでに小林先生には一蝶に関する著書『守景・一蝶』(日本美術絵画全集16巻 集英社刊)もありました。安村さんを中心に選ばれてその時展示された作品は、その後他所で行われた一蝶に関する展覧会の展示作品の中核をなすようになりました。若き日の安村さんの頑張りが半端でなかったことは言うまでもありませんが、一蝶作品の調査研究という点でわたしも大変に勉強になりましたし、美術館の仕事についての大きな経験になったことは確かです。

その後も安村さんは、着想のよい展覧会を次々に企画し、またそれらに奇想天

外な展覧会名を編み出し、板橋区立美術館の名を高らしめました。これをご縁に、わたしはしばしば展覧会を見るために板橋に通いましたが、美術館からの依頼で、作品の購入委員の責めを負うことも長らくありました。この度の「ちたばし展」には、そうした席で目にした懐かしい作品に再び出会うことになると思います。千葉市美術館の所蔵作品との、言うところのコラボレーションです。当館の担当学芸員は、その優れた作品選択の眼と素晴らしい展示センスによって、展覧会鑑賞者の期待に応える展示となるよう精一杯の努力をしております。ご来場のみなさまには、どうぞこの展覧会を存分にお楽しみ下さいませようお願い申し上げます。

〔館長 河合正朝〕

板橋区美 × 千葉市美

日本美術コレクション展

夢のちたばし美術館?

2019.6.1(土)ー23(日)

今回は夢のコラボレーションということですが、美術ファンの中には板橋と千葉どちらにも足を運んでくださる方というのも実は多いと思うですよ。うちのボランティアさんたちもそうですが、何か共通するところがあるのでしょうか。

私も、就職する前から両館とはお付き合い(?)が長く、日本の古美術、特に江戸絵画だと特別展はどちらも毎回両方行くし、所蔵品展も毎回見ていました。板橋区美は限られたスペースの中でベストチョイスな展示をするし、選ぶテーマも大家の大回顧展といったものよりも、意義深いテーマだったり、珍しい作家をとりあげているところが熱い支持を受けていると思っています。千葉は大回顧展もやるけれども、知られていない絵師やコレクションとか、ちょっと変わった角度から攻めるという点は、板橋と共通するかもしれないですね。

リニューアル工事のため休館中の板橋区立美術館にご協力いただいて、コレクションを紹介させていただくのですが、その際千葉の所蔵作品とのコラボレーション展示を考えたのは?

板橋は江戸の狩野派のコレクションが充実していて、琳派や洋風画の寄託作品も豊富です。対して、千葉は浮世絵が点数的にも多く、補完し合えるところがあると思いました。2館を組み合わせると江戸の絵画を概観できるかなと思ったところもあります。ただの名品展ではなく、二つの美術館が一緒になったことに意味を見いだしたいと思ったんです。

「夢のちたばし美術館」というタイトルですが、夢コラボの実例を何か紹介していただけませんか。

葛飾北斎の玉川図【図1】は、今は掛軸でそれぞれ分蔵されていますけれども、もとは六曲一隻の屏風で、それがあつた時に分かれたということは知っていたので、この機会に並べて展示したいと思いました。また、千葉には司馬江漢の《犬のいる風景図》【図2】という作品があるのですが、図様の近い作品が板橋に寄託されているので、実物を見比べられるように展示しています。他にも、サイズ感はちょっと違うけれども、モチーフがかなり似ている洋風画があったり、探すとけっこう……。江戸琳派は両館が所蔵しているので、あわせて今まで作品を並べて確認できなかったような絵師の作風が見えるようになるとか、いろいろおもしろいと思うところがあります。

コラボ展ならではのね。それぞれのコレクションから、おすすめの作品を教えてください。

うちの作品で言うなら、鈴木其一の《芒野図》【図3】ですね。其一の作品も、板橋区美が素晴らしいものをもちこなので、うちの名品とあわせてご覧いただくと、「其一はこういう人」という持ち味が見られて。琳派のセクションはそのあたりが見どころかなと思っています。

板橋の作品では、昨年企画展「百花繚乱列島」で、酒井抱一の《大文字屋市兵衛像》【図4】をお借りしました。作品としての出来も素晴らしい、なじみの吉原の妓楼のご主人を描いたという面白い作品です。市兵衛さんって世襲の名前なんです、三代目が描いた三幅対が板橋区美にあって、今回初代を描いた作品と、さらに三代市兵衛の描いた抱一風の作品が並ぶコーナーは、私個人的にグッとくるところです。



【図3】鈴木其一《芒野図屏風》江戸時代(19世紀) 千葉市美術館蔵

展示会は4章構成と聞きましたが、各章がどのように浮かび上がって来たのか気になりました。

板橋に寄託されている歸空庵洋風画コレクション(4章)は、マニア垂涎というか、いつかは拝見したいというような素晴らしいものなので、洋風画はぜひという願いが私としてはあり、幸い展示させていただくことが叶いました。セクションの中に浮世絵を入れるかという点はすごく悩まれました。ただ、直前の展示会*が浮世絵だったこともあり、ご覧いただく機会は多いかなと思ったので、今回は惜しいけれども抜かしました。

琳派(1章)はやはり抱一以降の人たちというのを、板橋区美は特にしっかり集めていらっしゃることを以前から知ってましたし、当館にも蓄積があるので、しみじみ各作家について足跡をたどってみたいなと思ってセクションとして入れたんですね。

幕末明治の技巧派(3章)というのは、柴田是真と岡本秋暉というのすごく挙がってきました。そしてやはり千葉は版画を豊富に所蔵しているので小原古邨が出て、ひとつセクションができました。

3つ出たところで、江戸の狩野派を見ていただきたいし、各館がやってきた展示会を少し思い出すようなコーナーがほしくて、個性派選手権(2章)というのを作りました。「諸国崎人伝」という展示会を板橋でなさった時は、まさに個性派選手権みたいなのところもあったんですけど、各所に両館の影が、展示会なり館のイメージがフラッシュバックするような空間にしたいと思いました。

ちなみに、両館の作品については、キャプションで色分けなどして強調することになりますか?

目論見としては、なるべく意識しないようにしたいですね。所蔵の表記は必要ですが、来てくださる方にはなるべく意識しないで一体感を楽しんでもらいたいです。これは板橋で、こっちは千葉で……というところで気が散ってほしくないから、『ちたばし』にしたというところは大事にしたいですね。

洋風画がすごく気になるといって、面白そうだなという期待が高まります。

面白いですよ!! ワンダーランドですから!! 技巧派のセクションがその前にあるわけけれども、是真や秋暉など、テクニクが完璧で美しい世界もあれば、こういう、和洋の狭間で葛藤していて、そがまた魅力的なジャンルも日本の古美術の大事な部分と思うのです。私はどちらかというと、写し崩れだったりとか、技術的には稚拙だけれども作者のがんばりが見える作品をつい好きになってしまうタイプなので、洋風画セクションは自分でも見るのが楽しみです。素晴らしい作品をたくさんご出品いただいているので。例えば、小田野直武の《恵比寿・大黒図》【図5】、鯛を抱えているんですけど、鯛に歯まで描いてあって、生真面目さにうたれます(笑)。箱に「これは小品だけれども大変すばらしい直武の作品である」と見た人が書いていて、開いてみたらその通りだったから、余計にシンパシーを感じるのかもかもしれません(笑)。

【話し手：学芸員 松岡まり江】

*「オパール」大学 アレン・メモリアル美術館所蔵、メアリー・エインスワース浮世絵コレクション(初期浮世絵から北斎・広重まで) 会期 2019年4月13日(土)~5月26日(日)



【図1】葛飾北斎《井手の玉川図》千葉市美術館蔵



葛飾北斎《萩の玉川図》板橋区立美術館蔵



【図4】酒井抱一《大文字屋市兵衛像》板橋区立美術館蔵



【図5】小田野直武《恵比寿・大黒図》歸空庵(板橋区立美術館寄託)

美術館の仕事を紹介します！

その4 広報の仕事①

「いまだんな展示会がやっているのかな」「あの展示会面白そう、行ってみたいな」こんなとき、皆さんはどうやって展示会や美術館の情報を手に入れていますか? 広報(PR)の仕事では、美術館や展示会の情報を手に入れる場所をいかに増やすか、いかに目に留めてもらうかが重要です。新聞や雑誌、テレビ、インターネットなど今の世の中には様々なメディアが溢れています。その内の1つだけに情報があふれすぎるといってわけではなく、いろいろな場所で目にするというのが情報を覚えてもらう最も基本的なポイントなのだと思います。まずはメディア側に展示会を知ってもらうためにプレスリリースを作成。そこからどのメディアが

選んで掲載してくれるか……は毎回ドキドキしながら待っています。またメディアに頼らず、美術館から直接発信する方法もあります。チラシやポスターがその代表。それぞれの展示会ごとに、担当学芸員と一緒に、対象となる年齢層や客層、もちろん展示会の内容も加味してデザインを考えます。外部のデザイナーさんに頼むことが多く、「ポップな感じで!」「大人っぽく」「上品に」など、こちらの意見をお伝えしてデザイン案が上がってくるときが、最も楽しい瞬間です。記事上に掲載した画像は「板橋区美×千葉市美 日本美術コレクション展ー夢のCHITABASHI美術館!」のデザイン案ですが、実際に決まったのは中央のデザイ

ンでした。皆さんはどれがお好きでしょうか? 千葉市美術館のチラシデザインはおかげさまで好評で、チラシを見て面白そう、というだけで四国や九州の遠方から足を運んでくださるお客さまもいらっしゃるくらいです。また最近ではTwitterなどSNSでの発信も重要です。より早く美術館の情報を得たい方々を中心にフォローいただいているほか、作品の画像や豆知識を発信することで新たに美術館に足を運んでくださる方がいらっしゃいます。今後は作品や美術館自体の見どころなどをInstagramでも発信していくことも考えています。アンケートなどで、もっと宣伝を! と叱咤

が目にするCMや駅での大型看板などかはかなり高額な宣伝費用が必要なため、当館では残念ながら利用できないのが現状です。もし、こういう場所にチラシを送ったら? ここならポスター貼れるよ、面白い発信の仕方があるよ、というアドバイス(あまりお金がかからない方法で……!)がありましたら、アンケートなどでぜひ教えてください。ご意見お待ちしております!

【広報担当 磯野愛】

美術館の新しい仲間を紹介します

庄子 真才(学芸員)

- ① 宮城県仙台市
- ② 写真
- ③ 写真を撮ること
- ④ ハコに行く(美術展、ライブ、映画、舞台など)
- ⑤ 土地や空間を活かした作品の見せ方。「ここで観るからおもしろい」という体験をたくさんしたい、生み出したい。
- ⑥ ロパート・スミソン《サンクン・アイランド》、1971年
- ⑦ スタッフそれぞれの専門を活かした企画運営をし、それが美術館のカラーとしてはっきり出ていること
- ⑧ まずはみなさんの仕事を見て、覚えて、学んで、そしてできるだけうちに自分の企画を動かしたいです!

田口由佳(学芸員)

- ① 千葉県千葉市
- ② ワークショップの企画運営
- ③ 素材さがし、画材あつめ
- ④ こたつでコロコロ(夏以外)
- ⑤ 地元密着型のイベント&ワークショップの発掘
- ⑥ 須田悦弘《雑草》、2012年
- ⑦ 個々の興味や能力を活かして働いているところ
- ⑧ 様々な立場や年代の人が活躍できる場を、美術館の中につくってきたいです。

森啓輔(学芸員)

- ① 三重県津市
- ② 近現代美術、美術批評
- ③ 子(1歳8ヶ月)が楽しめるおもちゃ探し
- ④ 家族でのんびり(したい)
- ⑤ 千葉市の見どころ穴場
- ⑥ 高松次郎《赤ん坊の影 No.387》、1974年
- ⑦ 毎回チームワークをいかした展覧会づくりをされているところ
- ⑧ 来年リニューアル・オープンする千葉市美術館にふさわしいと思っていただける展覧会を企画していきたい。

石崎日菜子(教育普及嘱託員)

- ① 埼玉県川口市
- ② グラフィックデザイン
- ③ スターウォーズ、書道、裁縫
- ④ Ipadでお絵かき
- ⑤ 工作
- ⑥ 小村雪岱《蜚》、1943年
- ⑦ スタッフからボランティアさんまで一丸となって良い展示会やイベントのために力を注いでいるところ
- ⑧ 毎回楽しみにしてもらえようような鑑賞ツールを作っていきたい。

- ① 出身
- ② 専門
- ③ 趣味・特技
- ④ 休みの日の過ごし方
- ⑤ いまいちばん興味があること
- ⑥ 千葉市美術館のコレクションでお気に入りの1点
- ⑦ 内側から見た千葉市美術館の魅力
- ⑧ これからやりたいこと、目論んでいること



アート&クラフト市 @さや堂ホール

2019年5月5日(日・祝)13:00~17:00
千葉市美術館1階さや堂ホールにて

5月5日、子どもの日。さや堂ホールの外は、開場を待つお客さんでいっぱい！千葉ゆかりの作家さんや飲食店をお招きした「アート&クラフト市」は、大盛況で幕を開けました。美術館で楽しいひとときを過ごしてほしい、という想いから企画されたクラフト市。20もの出展ブースが設けられ、会場は大にぎわいでした。

【出店者】

相川くるみ(千葉陶芸工房 陶芸担当) (陶磁)
外山慧(千葉陶芸工房 陶芸担当) (陶磁)
濱田敬史(千葉陶芸工房ガラス担当) (ガラス)
羽山加奈子(陶磁)
藤倉工房(木工)
こぎん刺し hanakogin (布小物、雑貨)
itokao (陶磁)
metalsmith iiji (アイアン小物)
nono-ya (イラストレーション、雑貨)
Surya-sae (布小物、雑貨)

【ワークショップ】

白鳥朝子(千葉陶芸工房 ジュエリー講座担当)
えかき屋 〇ふ(まるふ)
出かけるおもちゃ屋そのつ森
Driftwood_108
MiSHKeT
千葉市美術館
もくもく会(美術館ボランティア)

【フード】

シャボードパイユ
豆NAKANO
kiredo

リニューアルに向けて ①



ゴールデンウィークの間に千葉市中央区役所が移転し「オーバリン大学アレン・メモリアル美術館所蔵 メアリー・エインズワース浮世絵コレクション 一初期浮世絵から北斎・広重まで」も無事閉幕して、いよいよ改修工事のための作業が本格化してきました。まずは、安全のためのフェンスが設置され、その中で工事作業が進められることになります。改修工事が始

っても、美術館は年内は通常どおり開館するため、来館者の皆さんにはなるべく気持ち良く滞在していただきたいものです。入り口までの案内をわかりやすく、また、さや堂ホールを含めてなるべく建物の魅力を損なわないよう工夫が必要です。

工事と並行して、リニューアル後の事業を見据えたプレ企画も着々と進んでいきます。子どもたちの夏休みにあわせて、1階

のプロジェクトルームには、アーティスト豊福亮による来館者参加型の作品「パラチバ」が出現する予定です。これは、増床フロアに新設されるアーティストとつくる子どものための空間「つくりかけラボ」への布石であり、来年の夏には、小さなお客さまも夢中にさせる美術館としてリニューアルオープンを目指しています。

☆2020年1月より6月末(予定)まで、リニューアル工事のため全館休館いたします。

ボランティア日和

昨年の4月からボランティア活動を始めました。今までの一般教養的な美術鑑賞にもの足りなさを感じていたので、当美術館のボランティア募集に応募しました。今までとは違う鑑賞の仕方があると思ったからです。特にギャラリートークに興味を引かれました。先輩ボランティアのトークを見て、知識と感性に裏打ちされた素晴らしいものだと思いました。

自信がなかったのですが、石井林響展でギャラリートークに初めてチャレンジしました。千葉出身でこんなに素晴らしい日本画家がいることを知り、林響の人生と作品に思いを込めて勉強し、トークしました。ところが興味は尽

きず、林響の愛したと言われた鳥「ハッカク」を見に、千葉市動物公園に行ったり、林響が青春時代の一時期を過ごした、修善寺温泉の新井旅館に泊まって、当時の林響に思いを寄せたりと、世界がどんどん広がっていきました。また、絵画鑑賞で今までなかったものとして、音楽性の発見がありました。風のささやき・小鳥のさえずり・小川のせせらぎ等々に音楽を感じるようになったことです。

もう一つの活動として、多色摺木版画のボランティア会への参加があります。一つ一つ摺りを重ねて、最後の版の色摺りで完成した作品を見た時の感動は何とも言えないものがあります。この感動を皆さんに伝えたいと思



「生誕135年 石井林響展 -千葉に出づる風雲児-」(2018/11/23~2019/1/14) 会場風景

いも強く感じています。

ボランティアとしてマイペースを大切にしつつ、少しのチャレンジ精神を持って、楽しく活動を続けたいと思っています。
[美術館ボランティア 玉谷忠良]